

# 戦間期中国における鶏卵・鶏卵加工品輸出と養鶏業

吉田 建一郎

## 一、はじめに

一九世紀末から二〇世紀初にかけて中国の輸出貿易の構造は大きく変化した。それまでの二大輸出品であった生糸と茶の輸出総額に占める割合が八四パーセント（一八八〇年）から四六パーセント（一九〇〇年）へと大幅に減少する一方で、輸出品目もまた多様化した。<sup>(1)</sup>特に一八九〇年代は、多種類の農産品の輸出が活発になった時期であり、この時期を中国の小農経済が世界市場へ実質的に接合された画期とみなす考えもある。<sup>(2)</sup>

ここでいう農産品とは広く畜産品をも含めたものである。近代中国における家畜の飼養は、農家が残飯等を用いて飼育できる範囲内の頭羽数を庭先飼いする形態を中心としていた。<sup>(3)</sup>海関統計によれば、鳥卵（鶏卵・家鴨卵・鶯卵等）とその加工品、皮革類（牛皮・山羊皮等）、羊毛、豚毛の四品目の輸出額が中国の輸出総額に占める割合は、〇・七パーセント（一八八〇年）から六・九パーセント（一九〇〇年）、さらに一〇・三パーセント（一九二〇年）へと逐次増加しており、一九世紀末以降の畜産品輸出の活発化がここから看取できる。一九三五年において、上記四品目をはじめとする畜産品の輸出額は輸出総額の二一パーセントにのぼった。<sup>(4)</sup>このように近代中国の畜産業は輸出貿易

との関係において重要な位置を占めていたのである。戦前期における日本の中国調査報告にはその点を指摘するものが少なくない。<sup>(5)</sup>

ところで、こうした戦前期の日本で同時代的認識として示された中国畜産業の位置についての興味深い指摘は、これまで中国近代史研究の議論の中でどのように扱われてきたのであろうか。残念なことに、それらを具体的に深化・発展させる作業はこれまで積極的には行われてこなかったといつてよい。確かに近代中国の畜産品輸出について個々の商品の輸出货量、輸出額、輸出先、流通機構、輸出先での消費の状況、あるいは畜産加工品製造・輸出企業の設立過程や経営の状況などに関心が寄せられることはあったが、<sup>(6)</sup>輸出商品生産基盤としての畜産業そのものの動向には関心がほとんど向けられてこなかった。なるほど近代中国の畜産業に関して、飼養数や飼養分布の整理のほか、研究・教育機関の設立過程、繁殖や飼養管理技術の研究の進展、優良種の導入や種の改良の動向、獣医技術の発展などに言及した研究はある。<sup>(7)</sup>ただ、それらの多くは一定の時間軸に沿った個別的な事実の列挙が中心であり、その歴史的背景あるいは歴史的意義を具体的に論じるものではなかった。<sup>(8)</sup>近代華北農村における役畜を貸借し合う慣行〔搭套〕に注目した研究もあるが、その主眼は農村社会構造の解明に置かれている。<sup>(9)</sup>

以上の状況は、豊富な蓄積のある近代中国の生糸や茶の輸出に関する研究が、それら商品の生産基盤である養蚕業や茶業の動向への注目を伴ってきたのとは対照的であり、<sup>(10)</sup>その点において輸出商品生産基盤としての畜産業の動向に注目する必要性を強く感じさせる。

この作業には二つの意義が挙げられる。一つは近代中国貿易史研究の深化に有効な点である。近代中国貿易史研

究では、一九世紀末以降、すなわち生糸と茶にほぼ特化した輸出構造が大きく変化し多様な農産品輸出の活発化する時期において、どのような農産品の生産と流通を通じて中国農民が世界市場と結びついたかを具体的に明らかにする必要性が提起されて久しい<sup>(11)</sup>。しかし、これまでこの提起に即した研究は、大豆三品（大豆、豆粕、豆油）について一定の蓄積を持ちえたものの<sup>(12)</sup>、それ以外の産品について十分な分析を行ったとは言い難い。畜産業への注目はその状況を改めていく上で有効であると考ええる。

二つは、商品（食料・工業原料等）の生産基盤としての畜産業を近代中国経済史研究の一つの対象として正面から扱っていく点である。従来の近代中国経済史研究では、役畜としての家畜について検討されることはあつたが<sup>(13)</sup>、商品生産者としての家畜（用畜）の役割に着目したものは少なかつた。輸出品品の生産基盤としての畜産業の動向に注目することは、従来の研究において見られたそうした偏りを克服する契機となる可能性を含む。

本稿は以上のような問題意識に基づき、近代中国の輸出畜産品の中から鶏卵とその加工品（乾燥卵・冷凍卵・液状卵）を取り上げ、特に両大戦間期におけるそれらの貿易の動向と養鶏業の発展との関連に焦点をあてる。鶏卵と鶏卵加工品を対象とする理由は二つある。

第一に、鶏卵とその加工品が近代中国において輸出された畜産品の代表的存在であつたからである。一九三五年を例にとると、その輸出額は畜産品全体の約四分の一を占めた<sup>(14)</sup>。これらは畜産品の中だけにとどまらず、近代中国の輸出品全体の中でも代表的な輸出品目であつた。輸出額の順位は、一九一六年に第一〇位となつて以降一貫して上位を占め、一九二九年から三八年かけては第三位に位置した（一九三一年を除く）<sup>(15)</sup>。

第二に、近代中国における養鶏の中心的な担い手は、広い地域にわたって存在した副業的養鶏を行う農家であり、鶏卵と鶏卵加工品はアジアや欧米諸国を主要輸出先とする世界性を持つ畜産品であつたからである。鶏卵と鶏卵加工品をめぐるこうした特徴は、近代中国の農民と世界市場との結びつきが具体的にどのようなものであつたかを考察する上での格好の題材となりうるであらう。

時間軸として両大戦間期に焦点をあてるのは、後述するようにこの時期、中国からの鶏卵と鶏卵加工品の輸出を取り巻く環境に大きな変動が生じ、そうした変動により養鶏業の展開に何らかの変化が生じたとの見通しがあるためである。

これまで近代中国の鶏卵及び鶏卵加工品の輸出貿易については、輸出先別の輸出货量や輸出額、鶏卵の流通機構の整理のほか、鶏卵加工品製造企業の発展過程、関係史料の内容などが検討されてきた。<sup>(16)</sup> ただ輸出品生産基盤としての養鶏業の展開については、一九一八年と一九三四年の統計を比較することで、鶏卵加工品の生産・輸出の活発化を受けて農民が鶏の飼養数を増加させた蓋然性が若干指摘されるにとどまつている。<sup>(17)</sup> ここでは以上に挙げた先行研究の状況ならびに問題意識に基づき、一九世紀末から戦間期に至る鶏卵と鶏卵加工品の輸出の動向を整理した上で、戦間期における貿易環境の変動に並行して起つた養鶏業の変化がどのような特徴を持つものであつたのか、またそれらの歴史的意義は何であつたのかについて論じる。それはまた近代中国経済史研究における畜産業の多角的な位置づけを行う手がかりを得ることでもある。

## 二、鶏卵・鶏卵加工品輸出の本格化と戦間期の変動

### (一) 鶏卵・鶏卵加工品輸出の本格化

中国において鶏卵の輸出が本格化したのは一九世紀末―二〇世紀初である。<sup>(18)</sup>当初、日本、香港、マカオ、ロシア、英領海峽植民地が主要輸出先であったが、一九二〇年代半ば以降、イギリスやフィリピン向けの輸出が増加した(表1)。他方、一九世紀末以降、ヨーロッパ資本の工場を中心に製造が始まった鶏卵加工品は、二〇世紀に入り輸出が本格化し、ドイツやイギリスなど主に欧米諸国へ輸出された<sup>(19)</sup>。鶏卵加工品は料理や製菓の材料のほか、捺染剤(布地に文様を印刷するための薬品)、清澄剤(油や酒類の清澄、水砂糖の精製のための薬品)といった製剤用の原料、さらに各種工業用原料(皮革光沢剤、写真フィルム、漁網等の材料)と様々な用途があった。<sup>(20)</sup>

鶏卵や鶏卵加工品の活発な輸出を支えた大きな要因の一つは、「鶏ハ各村落到ル処ニ飼養セラレ農家ノ副業トシテハ必要不可欠ノモノトセラル」と表現される<sup>(21)</sup>ように、中国において養鶏が盛んに行われていたことであった。例えば一九一七年における鶏の飼養数は約二億八〇〇〇万羽にのぼっていた(広西・雲南・貴州を含みます)<sup>(22)</sup>。ただ、二〇世紀初頭の記録によると「(養鶏による農家の)利益ハ極メテ些少ナルヲ以テ未ダ一家ノ専業トシテ従事スルモノアラズ只僅ニ小資本ヲ以テ細利ヲ収拾スルニ過ギズ……種類ノ改良、繁殖、飼養ノ方法等一モ特記スベキナク僅ニ古来ノ因習ヲ無意識ニ襲用スルニ過ギ」<sup>(23)</sup>なかつた。飼養される鶏の「多クハ一二種ノ雑種」<sup>(24)</sup>で、各農家は「通常四五羽乃至十数羽ヲ……放牧的ニ飼養シ……普通ハ常例ノ家墻内ニ遊食セシメ」<sup>(25)</sup>ていた。そして産み出された鶏卵は、

【表1】 中国の主要輸出先別鶏卵輸出個数（1905-1934年）

（単位：1,000個）

年	総数	日本	香港	マカオ	ロシア	英領 海峡植民地	イギリス (本国)	ドイツ	フィリピン
1905	184,549	78,910	71,045	19,220	2,864	13,753	345	62	—
1906	215,532	96,496	69,305	16,560	19,009	13,735	144	1	9
1907	200,353	81,899	69,143	12,640	19,912	16,154	236	—	—
1908	238,294	98,803	78,817	14,206	30,492	14,394	368	—	—
1909	293,268	122,836	95,118	13,514	38,990	19,082	479	31	9
1910	305,810	112,085	97,779	13,010	61,602	17,322	746	14	7
1911	278,562	84,012	93,163	13,205	67,938	16,876	1,265	69	—
1912	291,705	92,062	90,462	10,898	78,102	16,902	1,173	146	—
1913	363,202	121,353	99,733	9,492	106,282	21,403	901	3	10
1914	395,490	119,320	96,432	8,301	84,925	19,163	16,348	118	3
1915	344,329	108,363	105,407	7,607	80,365	16,416	13,919	—	265
1916	354,011	91,389	100,489	8,031	89,315	15,561	37,717	—	31
1917	247,400	67,262	79,422	9,263	53,745	8,834	24,726	—	289
1918	209,867	103,945	72,933	11,428	13,621	305	398	—	261
1919	346,121	162,897	83,349	11,602	24,473	434	48,778	—	1,178
1920	646,700	418,165	95,798	11,975	13,786	4,673	84,577	6	404
1921	1,180,714	916,579	109,566	16,371	34,057	17,998	63,025	2	5,154
1922	1,181,980	813,958	84,597	7,482	25,421	12,265	157,156	—	33,872
1923	1,101,049	786,774	105,352	6,378	8,958	11,429	93,449	—	36,644
1924	930,662	644,078	114,748	5,434	1,566	6,700	117,436	4	32,874
1925	770,752	461,814	83,203	4,722	72	4,780	145,351	1,068	42,771
1926	739,993	444,616	77,004	1,385	49	4,036	134,871	12,698	63,778
1927	583,020	354,751	72,575	2,295	—	11,415	69,022	13,413	55,551
1928	612,544	275,079	77,042	2,721	—	9,015	153,414	28,746	60,590
1929	593,078	175,143	78,143	2,942	—	12,054	190,849	51,467	72,292
1930	602,311	154,376	92,062	3,391	—	14,940	232,018	27,090	74,202
1931	594,391	210,888	129,583	4,224	—	11,141	128,388	23,088	80,040
1932	341,797	2,553	142,464	2,994	—	5,011	107,749	31,427	48,241
1933	339,267	842	117,374	3,453	—	5,891	154,217	26,095	27,181
1934	305,037	201	119,174	2,981	—	8,068	149,851	2,799	18,479

（出典）China, Imperial Maritime Customs, *Returns of Trade and Trade Reports, 1905-1911.*

China, The Maritime Customs, *Returns of Trade and Trade Reports, 1912-1919.*

China, The Maritime Customs, *Foreign Trade of China, 1920-1934.*

（注）①出典の1905～1914年には1個単位まで記載があるが、100個の位を四捨五入した。

②1905～1923年は、ピータン（皮蛋）やシエンタン（鹹蛋）の輸出個数も含む。

③1934年の総輸出数には、輸出後に再輸入された134個を含む。

【表2】 中国の主要輸出先別鶏卵加工品輸出量（1910-1935年）

（単位：ピクル=約60kg）

年	総輸出量	イギリス (本国)	ドイツ	アメリカ	フランス	ベルギー	オランダ	イタリア	日本
1910	119,974	3,016	58,507	3,214	21,027	32,340	1,033	450	43
1911	129,026	2,069	75,816	5,291	14,450	27,817	1,966	1,491	38
1912	167,767	45,808	66,587	4,976	15,027	28,491	4,546	2,029	32
1913	232,668	68,254	84,709	9,735	32,738	23,408	5,954	1,783	18
1914	294,537	172,222	55,818	20,293	11,124	16,300	7,969	1,159	125
1915	297,140	230,033	—	33,703	20,666	—	7,132	2,128	163
1916	469,469	385,864	—	41,667	20,155	—	—	6,249	7,114
1917	440,690	242,601	—	158,528	9,255	—	—	1,363	3,747
1918	302,431	157,291	—	51,510	12,910	—	—	2,912	21,227
1919	794,388	549,741	90	171,715	19,903	8,669	8,243	1,950	4,011
1920	745,816	509,554	10,896	146,430	16,175	7,929	11,417	4,956	4,141
1921	484,084	358,126	21,992	88,014	4,423	4,384	2,958	596	1,537
1922	708,411	531,064	35,534	84,001	27,728	11,400	9,191	2,729	3,456
1923	752,900	468,566	19,211	172,158	61,412	8,428	8,557	3,261	1,245
1924	710,340	442,907	54,601	111,413	48,458	15,959	22,692	6,732	1,473
1925	1,004,215	607,496	83,814	198,284	46,069	16,752	26,094	10,510	1,926
1926	993,531	644,665	93,627	148,596	41,659	17,985	24,579	10,954	3,891
1927	756,420	460,015	92,733	80,845	42,286	17,812	43,328	4,927	7,081
1928	951,024	537,409	98,905	159,525	62,863	18,758	40,061	8,638	12,895
1929	1,131,191	677,867	128,640	153,600	66,728	26,713	39,937	9,378	18,802
1930	1,149,781	752,644	113,535	56,040	84,097	15,689	45,004	13,954	30,380
1931	994,546	689,704	78,275	48,301	75,150	18,906	47,456	8,959	18,583
1932	895,206	625,291	110,675	27,874	46,481	23,482	31,943	12,599	8,597
1933	794,860	539,027	86,846	21,339	44,788	28,031	29,061	17,647	22,276
1934	829,384	611,601	70,392	24,960	20,147	25,356	32,282	19,595	20,109
1935	925,465	680,795	77,052	74,623	19,731	17,127	26,169	7,354	17,787

（出典）表1に同じ。

（注）①出典は1934年から「公担」を単位としているため、1公担=1.65ピクルに換算。

②1935年の総輸出量には、輸出後に再輸入された2公担=約3.3ピクルを含む。

個々の農家を巡回して鶏卵を買い取る商人（「蛋販」）や鶏卵買付問屋（「蛋行」）といった仲介者、あるいは鶏卵加工品製造工場での加工を経て、上海、天津、漢口、青島を中心とする諸港から輸出された<sup>(26)</sup>。輸出处は江蘇、安徽、河北、山東、山西、河南各省を中心に広範囲にわたった。<sup>(27)</sup>

## （二）戦間期における貿易環境の変化

鶏卵・鶏卵加工品の輸出貿易において第一次大戦は一つの節目であった。両品の輸出額が一九一六年に初めて輸出品目の第一〇位以内を占めて以降順位を上昇させていく中、戦前とは異なる様々な動きが見られた。

まず、大戦勃発により生産活動が低下したヨーロッパでは、長期保存が可能な軍食用食料、民衆の栄養源あるいは各種工業用原料としての鶏卵加工品に対する需要が急激に高まった。これにより乾燥卵を中心に中国からの鶏卵加工品の輸出が増し、一九一九年の輸出量は一九一〇年の約六・六倍に増加した。<sup>(28)</sup> 大戦終結後の一九二〇年代に入ると、一九〇〇年代初頭に設立されたイギリス資本の和記洋行をはじめとする欧米資本の冷凍卵製造工場の拡張や、一九二三年に設立された中国資本の冷凍卵製造企業茂昌公司の発展などの動きが見られた。これに伴って冷凍卵の輸出が活発になり、一九三〇年の輸出量は一九二〇年の約三倍に増加した。また一九三〇年以降太平洋戦争勃発直前においては、鶏卵加工品輸出量の八割以上を占めるに至った。冷凍卵の中心的な輸先はイギリスであり、パン、ケーキ、ビスケット、アイスクリームなどの原料としてイギリス人の食生活を支えた。

他方、一九一〇年代に二、三億個台を推移した鶏卵の輸出数は一九二〇年に六億個台、さらに一九二一年から二



三年にかけては一億個台にまで急増した(表1)。これは日本向け輸出の急増が大きく関係している。日本は一九一八年の米騒動への対応として、食糧輸入の活性化による物価の引下げを目指し、その一環で一九二〇年に鶏卵の輸入税を撤廃した<sup>(29)</sup>。これに伴い一九一九年に約一億六〇〇〇万個であった日本向けの輸出数は、二年後の一九二一年には約九億二〇〇万個へ急増し、中国全体の輸出数の増加をもたらした。

以上のように第一次大戦期を境として鶏卵と鶏卵加工品の輸出の活発化が顕著になったが、反対にそうした流れにとつて逆風となる動きも少なくなかった。

まず大戦終結後、ヨーロッパ諸国が生産を回復させ自国の産業保護に努めたことに加え、<sup>(30)</sup> 欧米諸国が、亜鉛盤を用いて製造される乾燥卵の金属含有量や液状卵に含まれるホウ酸量の制限などを理由に中国産の鶏卵加工品を排斥する動きを見せるようになった<sup>(31)</sup>。それは中国からの乾燥卵の輸出に大きな減少をもたらし、大戦中百余りに急増した中国資本の乾燥卵工場は、一九一九年から一九二五年にかけて約二、三割にまで減少した<sup>(32)</sup>。

中国からの輸入品に対する排他的な姿勢は鶏卵加工品だけでなく生の鶏卵に対しても見られた。一九二〇年代に冷凍卵と並行して鶏卵の輸入も増加させたイギリスでは、中国産鶏卵は衛生的でないとの宣伝が新聞紙上でなされたほか、デンマークやオランダなど様々な国から鶏卵が輸入されるなか、<sup>(33)</sup> 中国産だけが差別的に“From China”の印を卵殻に付されることがあり、こうした現象は中国産鶏卵の販路を狭めるものと認識された<sup>(34)</sup>。

第二の逆風として、戦間期に世界各国で養鶏業の発展を目指す動きが活発になったことが挙げられる。まず一九二〇年から輸入税を撤廃し中国産鶏卵の輸入を急増させた日本では、一九二四年に輸入税が復活したのに続き、一

九二七年から中国産鶏卵の輸入防止を目的とする鶏卵増産計画が実施された。<sup>(35)</sup> 優良種の普及や養鶏技術の指導などを行う種鶏場の設置をはじめ、政府のバックアップを受けたこの奨励活動は鶏の飼養数増加を後押しした。<sup>(36)</sup> そうした動きに並行して一九二〇年代半ばから三〇年代初頭にかけて日本向けの鶏卵輸出数は大きく減少し、中国全体の鶏卵輸出数の減少をもたらした(表1)。

さらに一九二〇年代半ばに「欧米諸国に於いては大戦中は食糧問題の関係上、各国ともに養鶏に力を注いでゐたが平和後の今日では更に一層の奨励普及に努め、種類の改良を初めとして飼育管理法の改善、生産品の販売法その他一般に涉りて新研究に少なからず苦心を払っている」<sup>(37)</sup> という記述があるように、養鶏業発展の動きは欧米においても見られた。例えばアメリカでは一九世紀後半以降、飼料の安価な中西部が「全米の卵籠」の地位を占めてきたが、第一次大戦後、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ボストン、ニューヨークといった東西両海岸の諸都市近郊に大規模で生産力の高い專業的養鶏が展開するようになり、<sup>(38)</sup> 一九二〇年からの五年間で生産額がほぼ倍増と見込まれる伸びをみせた。<sup>(39)</sup> このほかイギリスやドイツでも一九二〇年代半ば前後に鶏の飼養数あるいは産卵数の増加が確認される。<sup>(40)</sup> イギリスではまた一九二〇年代末以降、政府の許可制に基づく国産品商標の発行や国産鶏卵の宣伝が活発化した。<sup>(41)</sup> 欧米諸国における以上のような動きは、中国の鶏卵や鶏卵加工品の販路を狭め輸出の減少に関係している、と見なされるものであった。<sup>(42)</sup>

第三の逆風として、世界恐慌に伴う輸出相手国による中国産品への高率関税賦課が挙げられる。例えばドイツは一九三二年から鶏卵に対し従価一〇〇パーセント、鶏卵加工品に対しては各製品別に従価二〇―一〇〇パーセント

の輸入税を課すようになった。<sup>(43)</sup> またアメリカは一九三〇年から三三年にかけて鶏卵加工品に対し従価一〇〇パーセント以上の関税賦課を行うに至った。<sup>(44)</sup> こうした相次ぐ高率関税賦課のなか、一九三四年の鶏卵と鶏卵加工品の輸出総額は一九二九年に比べて約四割に減少し、それに伴う卵価下落が各養鶏農家にもたらした収入減少の総額は、「其ノ農村ニ及ホセル打撃ハ蓋シ甚大」と評された。<sup>(45)</sup>

### 三、専門誌の養鶏業批判と発展策の提起

以上のような状況のなか、中国では鶏卵加工品の輸出税引き下げ（一九三四年六月）<sup>(46)</sup> や、一九二〇年代末以降に主要な開港場で相継いで設立された貿易品検査機関（商品検査局）<sup>(47)</sup> における商品検査実施などの反応が見られたが、それと共に見られたのが、貿易を取り巻く環境の変化を踏まえ中国の養鶏業の現状を問題視する議論であった。

一九二九年三月、南京国民政府工商部の下に国産輸出品の品質向上を図る検査機関として設立された上海商品検査局は、翌一九三〇年四月に月刊誌『国際貿易導報』<sup>(48)</sup> の刊行を開始した。その一卷八号（一九三〇年一月）に掲載された王宝靈「發展蛋類貿易与提倡養鶏事業」は次のような論を展開した。

茶の例が示すように、アヘン戦争後、中国の対外貿易は大多数の中国人が科学的方法を採用できなかったり、国際信用を顧みなかったりしたために日増しに悪化している。早くから自覚して積極的な改良が出来なければ、危機に及んで慌てて救済を図るのは難しかろう。第一次大戦後、日本やアメリカなど中国産鶏卵の主要輸入国では鶏卵の増産が活発化し、中国からの輸出は影響を受けた。イギリスでは中国産鶏卵への反発が激しい。欧

米諸国では養鶏を重要な実業と見なし、種や飼料などについて懸命に研究改良が行われ鶏卵増産を図っている。しかし中国では、農家は養鶏を副業と見なし、鶏が産み出す卵や肉は「落し物」程度に捉えられ、大規模な養鶏場もないため飼養法や種などについて考察が加えられることがない。このため鶏卵は重要な輸出品であるものの、中国の鶏一羽あたりの産卵量はアメリカと比べた場合に二〇個少ないとされ、全体として巨額に上る無形の損失を出している。

このほか、『国際貿易導報』五卷九号（一九三三年九月）所収の蔡無忌「巻頭語」は、世界恐慌の影響で鶏卵や鶏卵加工品の輸出が大きく減っている根本的要因は内在的なものにある、とし、その一つとして、農家が気ままに行い飼育法や飼料、施設などについて一定した配慮がない中国の養鶏業のあり方を挙げた。輸出貿易との関連で養鶏業のあり方を議論の対象とする動きはこれ以前にも見られたが、輸出貿易の逆風を意識して書かれた上述の議論は、養鶏業の現状に対する批判的姿勢が鮮明である点特徴的であった。ただし、上記の議論が養鶏業の現状の全てを否定したわけではなかったことは留意が必要である。上述の「発展蛋類貿易と提倡養鶏事業」は、先の主張に續けて今後の養鶏業発展の道筋について言及し、農業によって国を立て養鶏業を発展させることは自然なことであるが、中国の農民経済が弱い現状においては、政府の協力によって養鶏に関わる人材を各鄉村へ派遣するなどの対策が必要である、と説く。このように将来の養鶏業発展の基盤として想定されたのは農村であり、その労働力としての農民であった。

農民を担い手とする伝統的な形態を基軸に据えた養鶏業発展の構想は、一九二〇年代末以降刊行されるようにな

る養鶏を主題とする専門誌の中でも論じられた。以下「養鶏の提唱に最も熱心であつた畜産業界の先達<sup>(50)</sup>」とされる黄中成と張瑞芝という二人の人物がそれぞれ刊行の中心となつた『中国養鶏雑誌』と『鶏与蛋』の二誌について見てみたい。

『中国養鶏雑誌』は一九二八年三月から一九三二年六月にかけて中国養鶏学社から刊行された<sup>(51)</sup>。中国養鶏学社は一九二八年に黄中成が創設した、家禽に関する事柄を教授する通信教育制の学校である<sup>(52)</sup>。当初鉄路局の会計員であつた黄は、一九二一年、上海に小規模な養鶏試験場を開き、以後、養鶏に関する知識を教授するアメリカの通信教育制の学校で学びつつ、アメリカやイギリスで刊行された家禽飼養についての書物を通して知識を蓄え、一九二四年に徳園養鶏場という專業養鶏場を設けた<sup>(53)</sup>。『中国養鶏雑誌』刊行の大きな目的は養鶏に関する新しい知識を注入することにあり、この目的の基となる問題意識の一つとして、中国の鶏卵輸出が相当な額に上るにもかかわらず、中国人が養鶏をささいなものと見なしてしまつている現状を改めたい、という点が挙げられていた<sup>(54)</sup>。

他方『鶏与蛋』は、張瑞芝が主催者となつて一九三〇年に設立した中国養鶏学術研究会が一九三六年一月から一九三七年八月にかけて発行したものである<sup>(55)</sup>。張は、上海でイギリス資本の冷凍卵製造工場（怡和冷蔵廠）の買弁や協和行という蛋行の責任者を務め、一九二九年には外国種と中国種の鶏を計五千羽飼養する民生養鶏場を創設した人物である<sup>(56)</sup>。中国養鶏学術研究会は「養鶏に関する学術の研究及び養鶏や卵業の改良を使命とする」<sup>(57)</sup>団体であつたが、会の規模や構成員の詳細は明らかでない。ただ上述した張の経歴、また後述するこの会の活動に上海の蛋行の団体（上海市蛋業同業公会）が資金援助を行っていること、さらに一九三一年のこの団体の設立に中心的な役割を担

い主席も務めた人物である鄭源興が、中国資本の有力な冷凍卵製造企業茂昌公司の支配人であったことから、<sup>(58)</sup> 鶏卵の買付や加工を行う業界と一定の関係を有していたと思われる。「鶏与蛋」発刊の最大の目的は、養鶏と卵業との間に繋がりを持たせ、共に国際業務での繁栄を図ることにあり、輸出貿易と養鶏業との関わりが意識されていた。<sup>(59)</sup>

以上二誌は共に新しい飼養技術の紹介や、養鶏業や卵業に関するニュースなど様々な内容を含んでいたが、加えて養鶏業をどう発展させていくべきかについての議論も掲載した。まず「中国養鶏雑誌」では王兆泰「増加二十八万万改良全国鶏種計画商榷」(三四期、一九三一年)が次のような内容の論を展開し、中国経済において養鶏業が有している重要性和、農家養鶏が将来の中国経済の発展につながる潜在力を秘めている点を主張した。

中国を世界における新しい国家にしたいのならば郷村経済を改造せねばならない。中国農村の極めて重要な問題の一つは鶏の種の改良である。なぜなら世界で中国ほど養鶏が普遍的に行われている国はないからである。

養鶏は国家経済にとって非常に重要である。中国の民は生糸や茶の輸出については知っているが鶏卵やその加工品の輸出が相当な額に上ることを知らない。これは我が国が利源を発展させることを知らず、座して国家を貧弱にさせていることを示すものであり、実に惜しむべきことである。もし各農家が改良種を飼養して鶏卵一個を三元で売ることができたならば国全体の鶏卵による収入は外債返還額より多い四二億元にのぼるが、これまで改良が行われてこなかったため、本来あげられるべき総生産額の三分の二、つまり二八億元の収入を減らしている。鶏の種の改良は中国農村必須の活動である。

他方「鶏与蛋」では、一卷三期(一九三六年三月)の張瑞芝「養鶏事業与復興農村的關係」が、養鶏業の将来に言

及した論考として注目される。ここでは農民を担い手とする養鶏について、将来の鶏卵や鶏卵加工品の輸出に起きうる危機を回避するとともに、一九三〇年代の中国が直面した大きな課題である農村経済の復興に貢献する可能性を秘めたものとして捉える姿勢がおよそ次のように示された。

現在、鶏卵と鶏卵加工品は中国第三位の輸出品である。欧米や日本の政府は養鶏を非常に重要視している。もし我々が従来 of 不知不覚によつて鶏を自然の変化に任せておけば産卵量は日々減少してしまふであらうし、外国人は種の改良によつて鶏卵を増産し、洋米、洋麦、洋棉の例のように鶏卵と我々の金銭とを交換するようになるかもしれない。現在中国の雌鶏一羽の年間産卵数は平均六〇個を超えない。海外では改良により平均二〇〇個以上となっている。研究によると、純血種の雄鶏と在来の雑種の雌鶏とを交配すれば第一目の産卵量は一五〇個まで増えうる。こうした改良により一羽あたりの産卵量が一五〇個まで増えたと、仮に全国六千万戸の農民が一戸あたり一〇羽の養鶏を行つていた場合、中国の農村全体に六億元余りの購買力の増加をもたらす。このように養鶏は農村復興の方法のうち最も容易で早く効果を収めうる。養鶏改良の第一歩は農民を指導し彼らの鶏を改良することである。農民が大資本に変化して大規模な養鶏場を経営することは希望しない。農民は従来 of やり方で鶏を飼養すればよいと考えている。ただ改良には政治の力が必要である。純血種を育てる種鶏場を多く経営し、政府が純血種の雄鶏と雑種の雄鶏との交換を農民に促すのが望ましい。

## 四、南京国民政府期における鶏卵増産の試み

## (一) 南京国民政府の養鶏改良への関心

前節で挙げた各議論が発表された一九二〇年代末から一九三〇年代半ばにかけて、養鶏業の現状と将来に関心を寄せたのは専門誌だけにとどまらなかった。前節にて雑誌『鶏与蛋』との関連で言及した上海市蛋業同業公会は一九三五年一二月、南京国民政府（以下、南京政府と略称）の実業部に対し、これまで貿易の入超を補填し農村に利をもたらしってきた鶏卵輸出の重要性を維持し農村復興を目指すには養鶏の振興が効果的である、と述べた上で、全国の各農民に最低三羽の鶏の飼養を義務づけることを柱とした法律（提唱養鶏辦法）の制定・施行を求めた。<sup>(60)</sup> この請願が実施に移された形跡は見出されない。だが実業部は決して養鶏業の現状と将来に無関心であつたわけではなかつた。

一九三一年五月末、南京政府実業部は畜牧科科长李榮凱を中央広播電台（ラジオ局）に派遣し、李はそこで「我が国の畜産改良の方針及び具体的方法」と題する報告を行った。<sup>(61)</sup> この報告では中国の畜産業の整理にあたって種の改良が重要であることが述べられ、鶏については在来種に比べ産卵量が二倍余りあるレグホンをを用いた改良法が提起された。<sup>(62)</sup> この提起は「現在我が国の鶏卵は外国の迫害・排斥を受けており、是非とも方法を講じて改良せねばならない。その唯一の方法は鶏の改良にある。現在我が国は毎年六、七千万両相当の鶏卵と鶏卵加工品が輸出されている。この利源を維持しようとするだけでなく、できる限り改良進歩させていかねばならない」という表現に続け



て示されており、輸出貿易の動向が意識されていた。

一九三三年、南京政府は全国の模範を確立し、種の改良や畜産の発展を総括する機関として南京に中央種畜場を設立した。<sup>(64)</sup>これは畜産の発展を目指すにあたり種の改良を重視する南京政府の姿勢の一端を示すものといえる。しかし、中央種畜場が鶏の改良や優良種の普及に大きな関わりを持った形跡は、この種畜場の一九三四年五月から一九三六年六月までの活動報告による限り見出せない。<sup>(65)</sup>ただ、以下で述べるように、南京政府が種の改良を種畜場のみに関連づけていたわけではなかったという点には留意する必要がある。

一九三一年一二月、実業部は各省の建設庁、実業庁、農鋳庁に向けて、種畜場設立に適切な場所を速やかに定め、良好な種の育成・普及に備えるべく予算などの計画を提示するよう訓令を發した。<sup>(66)</sup>これに対し、種の改良と改良種の普及を目的とした試験場の設立をすでに準備中である、との回答を寄せた河南省建設庁や、我が省の家畜は不良なものが多く種畜場を設けることは非常に大切であり、いずれ計画を提示したい、との回答を寄せた浙江省建設庁のように訓令に前向きな姿勢を示す反応があった一方で、<sup>(68)</sup>河北省や江蘇省の關係機関からは省財政の問題から実施は困難である、との回答が寄せられた。まず河北省実業庁は、現在省の財源が非常に枯渇しており、新しく機関を設けるのは困難であるが、省の各農事試験場が種畜に関して注意を寄せている、とした上で、どの農事試験場がどの家畜の改良に取り組むかについて計画を示した。<sup>(69)</sup>また江蘇省実業庁は、省の財政事情が厳しく新規事業である種畜場設立計画は延期せざるをえない、との趣旨の回答を行った。<sup>(70)</sup>そうしたなか実業部は河北省実業庁に対して、提出された農事試験場の計画は妥当であり実行に移すよう指示した。<sup>(71)</sup>さらに江蘇省実業庁に対しては、家畜の飼養は

農家の重要な副業であるので計画の進行を遅らせるわけにはいかず、省の既存の各農事試験場が可能な範囲で畜産の問題を研究して種の改良や普及活動を行うべき、との考えを示した。<sup>(72)</sup>以上のやり取りからは、実業部が、家畜の改良にあたって必ずしも種畜場の役割だけに固執していなかったこと、さらに家畜の飼養は農家の重要な副業であり、農業関連の機関に改良種普及の役割を期待する姿勢を持っていたことが読み取れる。

次節で述べるように中国では一九二〇年代末から一九三〇年代半ばにかけて、農業推广工作や鄉村建設運動に関わる諸機関が中心となつて、農業あるいは農村を改良する一環として多産卵鶏の普及を目指す活動が展開される。それは、上述した専門誌上の議論や南京政府が想定した養鶏業發展の方向に沿う側面を持つものであった。

## (二) 多産卵鶏の普及活動

### ① 農業推广工作における活動

農業推广工作とは、一九二九年五月に南京政府が内政部、教育部、農鋳部（実業部の前身）三部の部令として農業推广規程を公布し、各省に対して実施を指示したことに始まる農業の發展と農民の生活改善を目指す試みである。<sup>(73)</sup>農業推广規程は優良な苗木、種子、家畜の供給、合作社の提唱と奨励、講演会等を通じた農民への知識普及といった多彩な事柄を工作の内容に挙げた。<sup>(74)</sup>農業推广工作の指導監督機関は、一九二九年一月に実業部のもとに創設された中央農業推广委員会（以下、農推委員会と略称）であり、各種関係規則の制定や、各省市の関係組織とその業務を検査指導する責任を負った。<sup>(75)</sup>他方、農業推广工作の実施機関としては、農推委員会が創設した二つの実験区

のほか、省市レベルの農業関係機関、県を単位に設けられた農業推广所、各地の教育機関が挙げられる。そして農推委員会の機関誌「農業推广」を中心とする関係資料からは、以上の諸機関が農業推广工作の一環として多産卵鶏の普及へ向けた試みを行ったことが知られる。

まず農推委員会の二つの実験区とは、一九三〇年に金陵大学との協力によって創設された烏江農業推广実験区と、中央大学との協力によって創設された中央模範農業推广区を指す<sup>(76)</sup>。

烏江農業推广実験区は安徽省和県に設けられた。ここは上海から輸出される鶏卵の主要な生産地の一つであった<sup>(77)</sup>。実験区の設置当初、農推委員会が費用面を管轄し、金陵大学が人員のほか、普及活動に用いる種子、苗木、家畜など（「推广材料」）を提供したが、満洲事変が勃発し中央政府の各機関が支出を減少させるなか、一九三二年四月からは金陵大学が費用面の管轄も行うことになった<sup>(78)</sup>。実験区の活動は七つの「組」が行い、鶏については生産組が繁殖を、社会組が普及作業を担った<sup>(79)</sup>。そして一九三四年に金陵大学からレグホン六〇羽を譲り受け、うち五六羽を農家に分配した。また残りの四羽を在来種二〇羽余りと交配し、産み出された鶏卵を農家に分与、孵化させて劣種を徐々に淘汰することが目指された<sup>(80)</sup>。実験区の報告には「かつて烏江は蛋行を十数軒有し鶏卵輸出で潤ったが現在は完全に衰退している。かつての地位を復興すべく、まず鶏の種の改良から着手したい」という旨の記述があり<sup>(81)</sup>、実験区の活動に輸出貿易を意識する側面があったことがうかがえる。

他方、中央模範農業推广区については、一九三〇年八月から一九三一年七月にかけて、レグホンの卵八三個が農家一五世帯に配られ、そのうち三九個が孵化されたとの記録がある<sup>(82)</sup>。

農業推広所、省市レベルの農業関係機関、そして各教育機関が関係したと確認される多産卵鶏普及の試みのうち、輸出向け鶏卵の代表的な生産地域における状況は表3のようにまとめられる。ここに挙げた諸機関の所在地のうち、特に如皋、泰県、靖江、高郵、淮陰、常熟の各県（以上江蘇省）は著名な生産地であった。<sup>(83)</sup>

ところで、表3に挙げた機関名の列挙に際して主に依拠した『農業推広』や『民国二十四年統編中国経済年鑑』に記載はないものの、多産卵鶏の普及について前節で紹介した中国養鶏学術研究会との関連で注目される社会教育機関として徐州民衆教育館が挙げられる。

徐州はイギリス資本の冷凍卵製造企業和記洋行による鶏卵の買い占めが「特二記セザルベカラザル<sup>(84)</sup>」と評されるほど、輸出向け鶏卵の代表的な生産地であった。徐州民衆教育館は一九三五年、中国養鶏学術研究会との協力で徐州に孵化場と養鶏場を設立し<sup>(85)</sup>、多産卵鶏であるレグホンや浦東鶏などの種卵の孵化、雄鶏の飼養、交配繁殖を開始した。<sup>(86)</sup>一連の経費一一〇〇元のうち八〇〇元を上海市蛋業同業公会が負担し、残り三〇〇元を中国養鶏学術研究会の主権者である張瑞芝が負担した。<sup>(87)</sup>この孵化場と養鶏場は翌一九三六年には徐州で鶏の支給活動を行ったほか、約二八〇〇羽にのぼる鶏の孵化、販売を江蘇省北部の各県に対して行った。<sup>(88)</sup>そうしたなか、養鶏場付近の鶏卵に形状や色の変化が現れたほか、さらに卵価上昇の動きも見られ、養鶏に対する農家の関心が喚起されることになった。<sup>(89)</sup>

## ② 郷村建設運動における活動

郷村建設運動における多産卵鶏普及の動向については、蓄積の豊富な郷村建設運動史研究において一部言及されているが、ここではそれらの成果を含めつつ整理を行う。<sup>(90)</sup>

【表3】 農業推广工作の関係機関による多産卵鶏普及の状況

省	機関名	飼養規模、普及活動の状況
江蘇	嘉定県農業推广所	レグホンを推广材料とする。285羽を飼養（1936年）。
	如皋県農業推广所	レグホンを推广材料とする。10羽を飼養（1936年）。
	靖江県農業推广所	レグホンと狼山鶏を推广材料とする。外国種（レグホンと思われる）97羽、中国種（狼山種と思われる）52羽を飼養（1934年）。
	青浦県農業推广所	レグホン14羽を飼養（1936年）。種鶏（レグホンと思われる）を推广材料とする。
	省立呉江 鄉村師範学校	レグホンと思われる雄鶏6羽、雌鶏13羽を、繁殖と普及の計画のもとに飼養（1930年代前半）。
	常熟県農業推广所	1935年春、レグホンの種卵を数百個購入し、孵化後、雌2 - 300羽を無償で農民へ配布。
	省立麦作試験場 淮陰分場	1934年に雑種鶏（レグホンと在来種の交配種と思われる）30羽余り、翌1935年に100羽余りを特約農家へ普及。
	省立稻作試験場 高郵分場	レグホン50羽を推广材料とし、1935年から普及活動を開始。
	省立原蚕種製造所	白色レグホンを推广材料とする。1936年からの普及を計画。
	武進湖塘橋 農村改進試験区	1931年設立。レグホン10羽を購入し、試験ののち農家へ配布。
上記の他、松江県、泰県、高郵県、高淳県、泗陽県、啓東県の各農業推广所がレグホンや狼山鶏を推广材料とする。		
河北	省立第六 農事試験場(易県)	1932年からレグホンの雄鶏と在来種の雌鶏との交配を開始し、多産卵鶏の広範囲な普及という省立第一農事試験場の目標に資することを計画。
	房山県農業推广所	レグホン数十羽を飼養（1935年）。在来種の改良を目指す。
	涞水農事試験場	白色レグホン雄鶏3羽、雌鶏4羽を飼養（1930年代前半）。良種の育成、農家への配布により改良を目指す。
山西	深澤県農事試験場 (深澤県農業推广所)	レグホンと思われる雄鶏5羽、雌鶏2羽を飼養（1930年代前半）。レグホンを買い足し、産卵、孵化後、農村へ配布する計画をもち、1933年に農業推广所となって以降、実施に移される。
	省立農業専科学校	レグホンを推广材料とする。1935年までの4年間で鶏1,000羽余り、鶏卵1,000個余りの普及を行う。
山東	私立銘賢学校	レグホンを推广材料とする。1年で種鶏150羽余り、種卵2,000個余り、雌100羽余りの普及を行う（1935年）。
	青島市政府 農林事務所	指定区域にレグホン896羽を配布（1935年）。
河南	青島工商学会	レグホンを推广材料とする。1934年から活動を開始し、1935年において繁殖と普及のための種鶏400羽を飼養。
	省第五区農林局 (輝県)	1932年12月に設立。レグホンを推广材料とし、1935年までに約400羽の雌を普及。
浙江	嘉善県立 農業改良場	レグホン15羽を含む鶏22羽を飼養。農民飼養に供するための繁殖、普及を行う計画（1930年代前半）。

(出典) 河北省実業庁から実業部、呈、1932年1月8日、実業部檔17-27-212(3)、「全国農業推广実施状況調査」『農業推广』7期、1934年12月、「全国農業推广実施状況調査(続)」『国内農事試験機関概況(3)』『農業推广』8期、1935年3月、「農業推广材料一覽表」『農業推广』9・10期合刊、1935年12月、「全国農業推广実施状況調査(続)」『農業推广』11期、1936年、実業部中国經濟年鑑編纂委員会編輯『民国24年統編中国經濟年鑑』商務印書館、1935年、(J)6-7頁、趙丕鐘「常熟県養鶏事業概況」『鶏与蛋』2巻7期、1937年、「各省養鶏調査」中央研究院近代史研究所蔵農林部檔案20-07-77-6、1936-1937年。

一九二三年に晏陽初を中心の指導者として成立した中華平民教育促進会の運動が展開した河北省定県は、天津から輸出される鶏卵の代表的な生産地の一つであった。<sup>(92)</sup>ここでは、レグホンの雄鶏と在来種の雌鶏との交配により産卵量が増加するという研究結果に基づき、アメリカから三〇羽余りの優良な鶏が購入されたほか、一九二九年からレグホンの大規模な繁殖と普及の準備が行われ、一年で一五〇〇農家がレグホンの雄鶏を飼養するに至った。<sup>(94)</sup>そして一九三一年に五二六羽、翌三二年に五八一羽、さらに三四年には一三四羽にのぼるレグホンの雄鶏の普及が行われた。<sup>(95)</sup>普及活動の重要な担い手として表証農家(モデル農家)があり、<sup>(96)</sup>彼らは在来種の雄鶏を飼養しない、飼養する雌鶏の数は五羽を下回らないようにするなどの規定を守ることが期待された。<sup>(97)</sup>

一九三一年六月に成立した山東鄉村建設研究院(以下、研究院と略称)が直轄の実験区を設けた山東省鄒平県は輸出向け鶏卵の主要な生産地ではなかったが、近接する膠済鉄道の沿線には済南、周村、益都、高密など山東省の著名な鶏卵集散地が少なくなかった。<sup>(98)</sup>研究院は開設にあたり、農民への農業科学の普及による生産の増加や、各種普及活動のために研究院の学生に対し研究実験の機会を提供することを目的として農場を設置した。農場の下部組織である研究股畜牧組は、各農家にレグホンの雄鶏を分与し、鄒平をレグホンの特質を持ち合わせた雑種が生息する地域へ徐々に変えていくことを計画の一つに定めた。<sup>(99)</sup>そして一九三三年三月から一九三五年八月にかけてレグホン九二羽、種卵三一八四個の販売、普及がなされるなどの動きを経て、<sup>(100)</sup>一九三六年前後までに鄒平で飼養される鶏はレグホンと在来種の雑種が中心であるという状況に至った。<sup>(101)</sup>

一九一七年、黄炎培を中心に発足した中華職業教育社(以下、職教社と略称)は一九二〇年代半ばから鄉村建設運

動に着手し、一九二八年から江蘇省崑山県の徐公橋鄉村改進黨區で農村改進黨事業を実施に移した。農家飼養向けのレグホンの普及活動が始まったのは一九三一年であり、この年の二月からの三ヶ月間で四二七羽が普及されるなどの動きを経て、一九三四年において、従来四羽であった試験區における鶏の平均飼養数は一一羽へ増加し、その多くをレグホンが占めた。<sup>(102)</sup>このほか徐公橋以外で職教社が鄉村建設に関わった江蘇省の黃墟農村改進黨試験區（鎮江県）や善人橋農村改進黨區（呉県）でも、詳細な数字は得られないが、一九二九年から一九三三年にかけてレグホンに代表される優良種の種鶏や種卵を農民へ普及し在来の鶏を徐々に改良していく試みが展開した。<sup>(103)</sup>

一九二七年に江蘇大学民衆学校として成立し、一九三〇年六月から改名された江蘇省立教育学院（以下、学院と略称）は、鄉村建設実験のため一九二九年に黄巷、一九三二年に北夏、惠北の三実験區を無錫付近に設けた。<sup>(104)</sup>学院は經濟建設の一項目に農事改良を挙げ、そこには優良な鶏の普及を含んでいた。そして一九三一年から年約三〇〇〇個にのぼるレグホンの種卵の廉価販売を行うとともに、毎年数十羽から一〇〇羽あまりの雄鶏の廉価販売や供給を行い、在来種との交配から生まれる第一代目の雑種による産卵量増加を目指した。<sup>(105)</sup>

以上のほか、燕京大学社会学系、齐鲁大学農村服務社、江西農村改進黨社が、それぞれ一九三〇年代に北京郊外の清河鎮、山東省の龍山鎮、江西省湖口県において、多産卵鶏を用いて在来種の改良を目指したが、鄉村建設運動に関わった機関の活動報告から確認される。<sup>(106)</sup>

## (三) 普及活動に対する評価

以上のように一九二〇年代末から三〇年代半ばにかけて、輸出向け鶏卵の主要生産地を含む各地において、多産卵鶏を利用した産卵量の増加を目指す試みが展開した。ただ、上述した動きは、限られた資料に基づくもので全てを網羅しきれしていない可能性が高いとはいえ、約二億四七〇〇万羽（一九三五年）と推定される中国全体の鶏の飼養数<sup>(97)</sup>からみて小規模なものであった。さらに日中戦争の激化に伴い、農業推広工作や鄉村建設運動に関わった機関の多くが活動の停止や内陸への撤退を余儀なくされるなか、中国の養鶏業に変化が起きつつあるとの認識が広く共有されるには至らなかった。一九四〇年に刊行された日本の調査報告は、「単に農家の副業として無方針に少羽数の鶏を飼養するに過ぎず……〔鶏〕の産卵能力の如きも一箇年五〇―六〇箇程度と称せられ、鶏の種類能力及経営状況より見て近代文明国家に於ける養鶏とは全く趣を異にする原始的養鶏を墨守し居る<sup>(108)</sup>」と、中国の養鶏業の現状を、遅れて変わらないものとして捉えている。この表現は決して誤ったものではない。しかしながら、戦間期の中国において、鶏卵や鶏卵加工品の輸出が様々な逆風を受けるなかで提起された養鶏業の一つの発展の方向、つまり、それまで輸出を支えてきた中国養鶏の特性を生かした発展を目指す方向に沿う動きが確かに存在した点は確認されなければならない。それは従来とは異なる方向へ養鶏業を發展させようとするものであり、当該時期の中国が古い養鶏業のあり方を頑なに墨守したとの評価を与えるのは留保が必要となる。

## 五、おわりに



以上、戦間期の中国における鶏卵・鶏卵加工品輸出の変化と養鶏業の展開をめぐる動向との関連について論じてきた。輸出を取り巻く環境が変化するなか、対外貿易や養鶏を主題とする専門誌上では、農家副業的な鶏の庭先飼養という形態を基軸とする養鶏業の現状を問題視する一方で、そうした形態を輸出の好転や農村経済の復興、あるいは中国経済の発展に貢献する可能性を秘めたものと捉え、これを維持・拡大させる必要性を説く議論が見られた。また鶏卵買付問屋の業界団体や南京政府も輸出貿易との関連で養鶏業の現状や将来に関心を寄せ、農家副業の一環としての養鶏を発展させる必要性を感じていた。一九二〇年代末から三〇年代半ばにかけて、農業推广工作や郷村建設運動において輸出向け鶏卵の主要生産地を含む各地で見られた多産卵鶏の普及を目指す動きは、専門誌上などで構想された養鶏業の一つの発展の方向に沿う地道な試みであったと捉えることができる。従来近代中国畜産業史の研究において、レグホンは産卵量が多いために農業推广工作の重要な材料になったという事実をごく簡潔に指摘するものがあるが、本稿で述べた内容はその事実の歴史的位置づけを明確にすることになろう。

今日、アメリカを中心に生産効率を重視した畜産の大規模経営化が顕著になるなか、畜産の発展段階を判断する基準をその経営規模に求める見方がある<sup>(10)</sup>。もしこうした見方に従うならば、本稿が扱った戦間期を含む近代中国の養鶏業は、小規模な庭先飼養を中心とする低い発展段階(第一段階)にあったとの評価が与えられることになる。

一九三七年に南京政府実業部が、その前年の養鶏業の状況について実施した調査によると、営利を目的とした專業養鶏場と見なしうるものは中国全体で一九ヶ所、合計の飼養数は約八五〇〇羽にすぎない<sup>(11)</sup>。しかし上述のように、戦間期において、個々の養鶏農家の経営規模拡張を目指すものではなかったものの、養鶏業を従来とは異なる方向

へ發展させようとする動きがあつたことを踏まえたとき、当該時期の養鶏業を一括して第一段階と片付けてしまうことには慎重にならざるをえない。また、こうした姿勢は、畜産の發展段階を判断する基準をひとえに経営規模の大きさに求めてきた従来の見方を相対化させる可能性を開くものではないだろうか。

本稿では、戦間期中国の鶏卵及び鶏卵加工品の輸出と養鶏業の展開に注目することを通して、近代中国において、貴重な輸出商品の生産基盤として畜産業を捉える認識や、そうした畜産業の發展を目指す志向と実践が確かに存在した点を強調した。冒頭でも述べたように、従来の近代中国経済史研究では、役畜としての家畜について検討がなされることはあつたが、それとは別に家畜が有する用畜としての側面を積極的に議論の中心に据える作業はなされてこなかった。ここではそうした作業が近代中国の輸出貿易史や畜産業史の研究の深化に非常に有効であること、すなわち近代中国経済史研究の一課題として成立しうることを示した。今後、取り扱う産品や時間軸を広げ、中国近代史における商品生産基盤としての畜産業の歴史的位置づけについて、より踏み込んだ検討が必要であると考えらる。

## 註

- (1) Yu-kwei Cheng, *Foreign Trade and Industrial Development of China: An Historical and Integrated Analysis through 1948* (Washington, D.C., The University Press of Washington, D.C., 1956), p.15.
- (2) 黒田明伸「近代中国における権力的改革の再検討」『歴史評論』四二二号、一九八四年。
- (3) 藤田泉「中国畜産の展開と課題」筑波書房、一九九三年、四〇頁。
- (4) 上田信三「畜産業・漁業・林業」(秀島達雄編輯『現

代支那講座』第四講、産業(一)、東亜同文書院支那研究部、一九三九年、所収)。

(5) 福田良久「支那に於ける農家経済と畜産との連係」『満鉄調査月報』二〇卷五号、一九四〇年、東亜研究所「支那ニ於ケル重要畜産資源ノ分布ニ関スル調査」一九四〇年、等。

(6) 代表的なものとして、許道夫編『中国近代農業生産及貿易統計資料』上海、上海人民出版社、一九八三年、三〇五—三二四頁、三三〇—三三六頁、上海社会科学院经济研究所・上海市国际贸易学会学术委员会編著『上海对外贸易一八四〇—一九四九』上海、上海社会科学院出版社、一九八九年、上册、二八八—三〇六頁、三三五—三四五頁、および下册、八七一—九五頁、一一一一—一四頁、二五八—二六六頁、一九八—二〇三頁、Chang J. Ning, "New British Companies in China: The Case of International Export Company in Hankou, 1907-18", *Studies in Chinese History*, No. 8, 1938. リンダ・グループ「華北における对外贸易と国内市場ネットワークの形成」(杉山伸也・リンダ・グループ編『近代アジアの流通ネットワーク』創文社、一九九九年、所収)、張寧「跨国公司与中国民族資本企业的互动…以两次世界大战之間在华冷凍蛋品工

業的發展為例」『中央研究院近代史研究所集刊』三七期、二〇〇二年(以下、張A論文と略称)、同「技術、組織創新与国際飲食変化——清末民初中国蛋業之發展」『新史学』一四卷一期、二〇〇三年(以下、張B論文と略称)、が挙げられる。

(7) 許、前掲書、二九二—三〇四頁、三二六—三二九頁、郭文韜等編著『中国農業科技发展史略』北京、中国科学技术出版社、一九八八年、四四七、四五九—四六〇頁、郭文韜・曹隆恭主編『中国近代農業科技史』北京、中国農業科技出版社、一九八九年、四四三—五三八頁、李群「我国近代畜牧科技的引進与畜種改良实践」『中国農史』一五卷一期、一九九六年、王銘農「近代江蘇畜牧業概述」『中国農史』一六卷四期、一九九七年、等。

(8) 近代中国の鄉村建設運動史研究の文脈で畜産改良に言及した、三品英憲「一九三〇年代前半の中国農村における經濟建設——中華平民教育促進会の『定県実験』をめぐる一考察——」『アジア研究』五〇卷二号、二〇〇四年、のような例外もある。

(9) 内山雅生『中国華北農村經濟研究序説』金沢大学經濟学部、一九九〇年、一三七—一五三頁。

(10) 例えば、上野章「經濟建設と技術導入——江蘇省蚕糸

- 業への一代交雜種法の導入を例に——」(中国現代史研究会編『中国国民政府史の研究』汲古書院、一九八六年、所収)、奥村哲「恐慌下江浙蚕糸業の再編」『東洋史研究』三七卷二号、一九七八年(のち、同『中国の資本主義と社会主義—近現代史像の再構成』桜井書店、二〇〇四年、所収)、秦惟人「近代中国の茶貿易—輸出の『凋落期』を中心に——」(辛亥革命研究会編『中国近現代史論集—菊池貴晴先生追悼論集——』汲古書院、一九八五年、所収)がある。
- (11) 秦惟人「近代中国貿易史研究の動向と課題」(辛亥革命研究会編『中国近代史研究入門—現状と課題——』汲古書院、一九九二年、所収)。
- (12) 雷慧兒「東北的豆貨貿易(一九〇七—一九三二年)」台北、台湾師範大学歴史研究所、一九八一年、塚瀬進「滿洲事变前、大豆取引における大連取引所の機能と特徴」『東洋学報』八一巻二号、一九九九年、等。
- (13) 例えば、内山、前掲書、一三七—一五三頁、がある。
- (14) 前掲「畜産業・漁業・林業」。
- (15) 海關統計には鳥卵及びその加工品として輸出額が掲載されている。ただ鳥卵の最多数は鶏卵であり、その他の輸出総額に占める割合は極めて小さいため(嚴仁廣「中国対日蛋類貿易之後顧与前瞻」『社会科学雜誌』四卷四期、一九三三年)、本稿では鶏卵と鶏卵加工品として論を進める。
- (16) 許、前掲書、三三〇—三三六頁、前掲『上海対外貿易』上冊、二八八—三〇六頁、および下冊、一一—一二二頁、Chang, op. cit. 張、前掲A・B各論文、吉田建一郎「戦前日本の中国鶏卵に関する調査報告について」『近代中国研究彙報』二四号、二〇〇二年。
- (17) 張、前掲B論文。近代中国における鶏の飼養数を扱った統計には数値のばらつきが多く、それらの単純な比較による飼養数の増減の確定は慎重を要すると思われる。
- (18) 吉田、前掲論文。
- (19) 同右、張、前掲B論文。
- (20) 同右。
- (21) 東亜同文会編『支那經濟全書』第九輯、一九〇八年、六〇頁。
- (22) 農商部総務庁統計科『中華民國六年第六次農商統計表』一九二〇年、二六三頁。
- (23) 前掲『支那經濟全書』六〇頁。
- (24) 同右。
- (25) 前掲『支那經濟全書』六一頁。
- (26) 鶏卵の流通機構については、張、前掲A論文、吉田、

前掲論文を参照。

- (27) 南満洲鉄道株式会社上海事務所「卵及び卵製品」一九三九年、五一―八頁。
- (28) 張、前掲B論文。以下本段落の内容は張、前掲A・B各論文を参照。
- (29) 大阪鶏卵販売株式会社編「卵業百年」大阪鶏卵販売、一九八二年、二三頁。
- (30) 久保亨「中国経済一〇〇年のあゆみ——統計資料で見える中国近現代経済史」第二版、創研出版、一九九五年、三〇頁。
- (31) 張、前掲B論文。
- (32) 同右。
- (33) R K生「英国の鶏卵問題(一)」『養鶏』一卷三号、一九二九年。
- (34) 牲畜正副産品検査処「中国産産品之輸出貿易」『國際貿易導報』一卷一号、一九三〇年。
- (35) 大阪鶏卵販売株式会社、前掲書、二七、三三―三頁。
- (36) 北村修二「わが国における養鶏業の地域的展開」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』三三三、一九八七年。
- (37) 「欧州諸国の養鶏奨励」『家禽界』一四卷七号、一九二四年。

- (38) 杉山道雄「養鶏経営の展開と垂直的結合——アメリカ養鶏産業の研究」明文書房、一九八九年、三八―四〇頁。
- (39) 「圧倒的な米国の養鶏」『家禽界』一五卷六号、一九二五年。

- (40) 前掲「英国の鶏卵問題(一)」、芝田清吾「独逸の養鶏」『養鶏』二卷八号、一九三〇年。
- (41) R K生「英国の鶏卵問題(二)」『養鶏』二卷一号、一九三〇年、同「英国の鶏卵問題(三)」『養鶏』二卷二号、一九三〇年。
- (42) 前掲「中国産産品之輸出貿易」、「蛋及蛋製品(統)」『工商半月刊』四卷一号、一九三二年。
- (43) 鄭源興「中国蛋業史略」『國際貿易導報』五卷九号、一九三三年。
- (44) 同右、侯厚培「一九三〇年美国新税則与中美貿易之前途」『國際貿易導報』一卷八号、一九三〇年。
- (45) 南満洲鉄道株式会社調査部「上海ニ於ケル畜産物集散概況」一九三九年、二二―二三頁。
- (46) 久保亨「戦間期中国(自立への模索) 関税通貨政策と経済発展」東京大学出版会、一九九九年、一二七頁。
- (47) 藤平重蔵「支那に於ける鶏卵加工業と輸出状況(二)」『養鶏』八卷五号、一九三六年。

- (48) 濱下武志・久保亨編『中国經濟關係雜誌記事総目録』(二)——『國際貿易導報』——東京大学東洋文化研究所附屬東洋学文献センター、一九八五年、四頁。
- (49) 例えば倪慰儂「鶏之配種說」『農商公報』七卷九冊、一九二一年。
- (50) 謝成俠編著『中国養禽史』北京、中国農業出版社、一九九五年、一八七頁。
- (51) 伍杰主編『中文期刊大詞典』下、北京、北京大学出版社、二〇〇〇年、二二二四—二二二五頁。
- (52) 謝、前掲書、一八七頁。
- (53) 「黃中成先生」『鶏与蛋』一卷二期、一九三六年。德國養鶏場については、興亜院華中連絡部『上海近郊ノ畜産ニ就テ』一九三九年、七五—七六頁。
- (54) 黃中成「発刊縁起二」『中国養鶏雜誌』一卷一号、一九二八年。
- (55) 前掲『中文期刊大詞典』上、七〇四頁、謝、前掲書、一八七頁。
- (56) 前掲『上海対外貿易』上冊、二九七頁、前掲『上海近郊ノ畜産ニ就テ』七三頁。
- (57) 編者「巻頭語」『鶏与蛋』一卷一期、一九三六年。
- (58) 張、前掲A論文。
- (59) 張瑞芝「『鶏与蛋』雜誌発刊辞」『鶏与蛋』一卷一期、一九三六年。
- (60) 上海市蛋業同業公会から実業部、呈、一九三五年二月二八日、中央研究院近代史研究所蔵実業部檔案(以下、実業部檔と略称)一七一—二〇八(二)。
- (61) 郭・曹、前掲書、四六七頁、「畜牧改良方針及具体辦法」『民国日報(上海版)』一九三二年五月二九日。
- (62) 同右。
- (63) 「改良畜牧方針及具体辦法」『民国日報(上海版)』一九三一年六月二日。
- (64) 郭・曹、前掲書、四六五頁。
- (65) 中央種畜場から実業部、呈、一九三六年八月二〇日、「実業部中央種畜場二十三年五月起二十五年六月止一切事業進行狀況総報告書」、実業部檔一七一—二七—二三八(二)。
- (66) 実業部から各省建設庁・実業庁・農鉱庁、訓令、一九三一年二月二日、実業部檔一七一—二七—二二二(三)。
- (67) 河南省建設庁から実業部、呈、一九三三年一月八日、実業部檔一七一—二七—二二二(三)。
- (68) 浙江省建設庁から実業部、呈、一九三三年一月三日、実業部檔一七一—二七—二二二(三)。
- (69) 河北省実業庁から実業部、呈、一九三三年一月八日、

実業部档一七一二七一二二(三)。

(70) 江蘇省実業庁から実業部、呈、一九三三年一月三日、  
実業部档一七一二七一二二(三)。

(71) 実業部から河北省実業庁、指令、一九三三年一月九  
日、実業部档一七一二七一二二(三)。

(72) 実業部から江蘇省実業庁、指令、一九三三年一月三〇  
日、実業部档一七一二七一二二(三)。

(73) 『国民政府公報』一六六号、一九二九年五月二六日。  
(74) 同右。

(75) 謝国興『中国現代化的区域研究 安徽省(一八六〇—  
一九三七)』台北、中央研究院近代史研究所、一九九一年、  
三三七頁。

(76) 同右書、三三七—三三八頁。

(77) 俞洞謨『上海之鮮蛋貿易』『國際貿易導報』二卷八号、  
一九三二年。

(78) 『烏江農業推広実験区二十三年度工作報告』『農業推広』  
九・一〇期合刊、一九三五年。

(79) 鄉村工作討論会編『鄉村建設実験』第三集、上海、中  
華書局、一九三七年、五二三、五二四頁。

(80) 前掲『烏江農業推広実験区二十三年度工作報告』。  
(81) 『烏江農業推広区実施工作報告』『農業推広』八期、一

九三五年。

(82) 『中央模範農業推広区一年來工作概要』『農業推広』三  
期、一九三一年。

(83) 前掲『上海之鮮蛋貿易』、前掲『卵及び卵製品』六頁。  
(84) 山東鉄道調査課『徐州事情』一九一七年二月調、八頁。

(85) 『本会与徐州市立民衆教育館開辦合作養鶏場』『鶏与蛋』  
一卷一期、一九三六年。

(86) 張瑞芝『中国養鶏學術研究会過去事業之検討及今後努  
力的方向』『鶏与蛋』二卷一期、一九三七年。

(87) 『本会与徐州市民教館合弁之楊莊養鶏場二十五年年度概  
鶏概況』『鶏与蛋』一卷九期、一九三六年。

(88) 同右、『徐州鶏種経改良後其産品已可供裝箱蛋用』『鶏  
与蛋』一卷九期、一九三六年。

(89) 『徐州府改良鶏種蛋産品品質提高』『鶏与蛋』一卷一  
期、一九三六年、張瑞芝『參觀青島徐州養鶏場後之感想』  
『鶏与蛋』二卷二期、一九三七年。

(90) 李孝悌『河北定県的鄉村建設運動——四大教育』『中  
央研究院近代史研究所集刊』一一期、一九八二年、鄭大華

『民国鄉村建設運動』北京、社会科学文献出版社、二〇〇  
〇年、二三一、二九二—二九四、三九三頁、小林善文『中  
国近代教育の普及と改革に関する研究』汲古書院、二〇〇

二年、三〇一—三〇二頁、三九一—三九二頁、四六六頁、三品、前掲論文。

(91) 烏江農業推広実験区をはじめ、前節で言及した農業推広工作関係の機関には郷村建設運動の担い手とも見なされるものが含まれているが、本節は前節で言及した以外の機関の動向を扱う。

(92) 前掲『卵及び卵製品』七頁。

(93) 中華平民教育促進会『定県の実験』一九三五年、七七—七八頁。

(94) 馮銳「普及農業科学制度在河北定県試行四年之概況」(統)『農業推広』二期、一九三〇年。

(95) 前掲『定県の実験』七八頁。

(96) 馮銳「普及農業科学制度在河北定県試行四年之概況」『農業推広』創刊号、一九三〇年。

(97) 前掲「普及農業科学制度在河北定県試行四年之概況」(統)。

(98) 濟南鐵路局総務処資業科「山東鶏卵事情」一九四三年、頁なし。

(99) 許登漣・李競西・段繼李共編『全国郷村建設運動概況』第一輯、一九三五年、八九頁。

(100) 「農業推広材料一覽表」『農業推広』九・一〇期合刊、一九三五年。

(101) 鄭、前掲書、二九三頁。

(102) 同右書、三九三頁。

(103) 前掲『全国郷村建設運動概況』四四八、四五四頁。

(104) 鄭、前掲書、八五—八六頁。

(105) 郷村工作討論會編『郷村建設実験』第二集、上海、中華書局、一九三五年、一七〇頁。なおここでの雄鶏とは、前掲『郷村建設実験』第三集、七二頁、から、レグホンヤ狼山鶏などの雄鶏であると思われる。

(106) 郷村工作討論會編『郷村建設実験』第一集、上海、中華書局、一九三四年、七九、一八六頁、および前掲『郷村建設実験』第三集、四八三頁。

(107) 前掲『卵及び卵製品』一頁。

(108) 華北産業科学研究所「北京四郊に於ける養鶏経営狀況・

鶏の種類及形質調査報告書」一九四〇年、一頁。

(109) 郭・曹、前掲書、四七三頁、李群、前掲論文。

(110) 藤田、前掲書、二四五頁。

(111) 「各省養鶏場調査」、中央研究院近代史研究所所蔵農林部档案二〇一〇七七—二二。